The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Principles and Practices for EIL Education in Japan
Author(s)	日野, 信行
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/53888
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　日野　信行　）	
論文題名	**Principles and Practices for EIL Education in Japan** （日本における「国際英語」教育の原理と実践）

論文内容の要旨

本博士論文の目的は、「国際英語」(EIL) (English as an International Language) の教育に関する原理を明らかにするとともに、日本の英語教育への応用について、その具体的な教育方法を示すことにある。「国際英語」とは国際コミュニケーションのための英語を指すが、ここでは英語教育の用語としてさらに、英米文化の枠や母語話者の規範を越えた多様な英語という意味を有している。

本博士論文は全４部から構成されている。以下にそれぞれの内容を要約する。

第１部（第１章）は、本テーマの概観である。グローバリゼーションの流れの中、日本においても企業活動や高等教育など社会のさまざまな分野において国際コミュニケーションのための英語へのニーズが高まりつつある現在、我が国の在来の文化や価値観の尊重という重要課題とのジレンマに対応できるような英語教育のあり方について考察する。この中で、Smithによる古典的なEIL論を出発点として、さらに KachruのWE (World Englishes)論、また近年のJenkins や Seidlhofer によるELF (English as a Lingua Franca)論などの国際英語論を適宜応用しながら、受容的側面では言語的・文化的に多様な英語の理解、そして産出的側面では日本的な価値観を表現できるとともに国際的に理解されるような英語を目指す教育を実践することの意義を論じている。そのような理念に基づく「国際英語」教育の具体的な態様については、続く各章で展開されている。

第２部（第２章）は、「国際英語」教育研究の体系の試論を提示している。「国際英語」教育の研究は１９７０年代に始まり、すでに少なからぬ研究成果の蓄積があるが、一方で、それらの研究を体系的に統括するパラダイムが存在しないため、非常に混沌とした状況を呈してきた。本章は「国際英語」教育研究の生産性を向上させることを目的とするものであり、「国際英語」教育の関連諸分野を軸に「国際英語」研究の全体像を鳥瞰するための暫定的な体系を構築している。さらに各項目における研究の主内容を示すとともに、独自の考察を加えながら「国際英語」教育の基本的な原理を抽出している。

第３部（第３・４・５章）は、「国際英語」教育の理論から実践への橋渡しを意図するものである。「国際英語」教育の主要な要素である教材・教授法・モデルに関し、「国際英語」教育の原理を具体的に論じるとともに、教育実践への応用について考察している。

まず第３章は、国際英語の教材論である。多様な価値観の理解及び自己の価値観の表現という「国際英語」教材の原理に照らしながら、日本の学校教育における英語教科書の文化的内容を通時的に分析し、英語教科書の文化的内容が各時代の政治的環境やイデオロギーの強い影響下にあることを示している。またこの考察の上に立ち、日本の英語教科書の歴史的考察から得られる知見として、国際英語とナショナリズムの間の微妙な相克について論じている。

次に第４章は、国際英語の教授法論であり、英語の使用者自身の文化を尊重する国際英語の立場に基づいて、日本に適合する英語教育のあり方について分析する。特に日本の独特の漢字文化に適した英語教授法という視点から、訳読の伝統に着目する。今日の我が国の英語教育における訳読法は、長い歴史を有する漢文訓読法が蘭学におけるオランダ語の訓読を介して英語教育に受け継がれたものであり、日本の伝統的な言語文化における「文字言語」と「和訳」への志向性を示すものである。戦前のオーラル・メソッドや戦後のオーラル・アプローチなど、音声言語を重視するとともに訳を抑制する傾向のある英米の英語教授法が、少なくとも当初の原型のままでは日本に定着しなかった原因のひとつは、日本人の言語観との乖離に見出すことができる。このような視点に立ち、日本における「国際英語」教育では、和訳を単に排除するよりも適切な形での有効利用を考えるべきこと等を含め、日本の言語文化との親和性に配慮した教授法の重要性について論じている。

さらに第５章は、日本の英語教育における国際英語の産出モデルの必要性について、具体例を挙げながら考察している。従来の「国際英語」研究において最も有力であったWE論は、いわゆる Outer Circle の英語、すなわち英米の

旧植民地における「ポストコロニアル英語」を対象として発展してきたため、国民間での英語使用が一般的でない日本のようないわゆる Expanding Circle における独自の産出モデルの可能性には否定的であった。これに対し筆者は、国際コミュニケーションのための英語教育におけるモデルの問題にポストコロニアル英語の国内使用に関する理論を直接に適用するのは妥当でない、と指摘する。そして、日本など Expanding Circle においては、国際コミュニケーションにおける経験の集積や、国際英語の理解度に関する研究の知見等に基づき、英語教育実践を通じて独自のモデルを創造していくべきであると提案している。このような立場から、日本文化の表現に適すると同時に国際的にも理解されるような英語のモデルについて、音韻・文法・語彙・談話などの側面に分けて若干の試論を示している。

第４部（第６・７・８・９・１０章）では、以上の議論を踏まえながら、筆者自身の授業実践を中心として、「国際英語」授業の具体的な実践について報告し、分析している。

まず第６章では、第４部の総論として、国際英語の授業方法を５種類に分類し、それぞれの特徴について論じる。国際英語の授業実践例は従来少ないが、その中でもあえて「国際英語」教育と銘打って行われてきた授業の方法を分析し、1. 国際英語の現状に関する知識の伝達 2. 国際英語の状況を模したロールプレイ 3. 英米語とは異なる多様な「国際英語」素材の読解・聴取 4. 国際英語における内容中心的アプローチ（Content-based approach） 5. 国際英語の実践共同体への参加、の５類型に分けている。

第７章は、筆者が１９８９年から１９９０年にかけて週１回、９カ月間、講師をつとめたラジオ英語教育番組での国際英語の実践について報告する。従来の日本のラジオ・テレビの英語教育番組では、母語話者モデルの英語教育が当然視されており、番組で設定されるコミュニケーションの状況も、母語話者間、あるいは母語話者と日本人のインタラクションとして構成されるのが通例であった。筆者は、全国規模で放送される本番組を通して日本の英語学習者に国際英語の言語的・文化的多様性を認識してもらうことを主目的として、さまざまな非母語英語変種の話者と筆者との対談を毎回実施した。その出身国は、マレーシア・香港・スリランカ・バングラデシュ・フィリピン・フランスの６か国にわたった。聴取者の肯定的な反応からは、本番組は一定の成果を収めたものと判断された。

第８章では、筆者が大阪大学の共通教育の英語授業を通じて開発した国際英語の教授法であるIPTEIL (Integrated Practice in Teaching English as an International Language)について報告する。メディアリテラシー教育・グローバル教育・内容中心的アプローチなど、さまざまな教育的概念を国際英語の理念に統合しながら実践する教授法である。大阪大学共通教育賞を通算１４回受賞したこの授業方法では、CALL教室において、授業当日のニュースをインターネット（場合に応じて当日の衛星放送テレビの録画も使用）のさまざまな国の英語ニュースメディアで視聴し、さらに当該のニュース項目についてリアルタイムで電子版英字新聞を読む。当日の最新のニュースの視聴や読解という、現実の国際英語ユーザーが行っているオーセンティックなタスクを通じて国際英語ユーザーの共同体に参加する、という趣旨の授業である。このクラスではたとえば、立場の異なる各国のメディアの論調を同じニュースに関して比較対照することによって、メディアリテラシーの養成につとめている。多様な価値観が展開される国際英語の世界において自らの主体性を確立しながら国際コミュニケーションに従事するための訓練である。

第９章は、米国における国際英語論のパイオニアである Larry E. Smithが近年ハワイで主宰している「国際英語」教育プログラムの意義について、現地でのフィールドワークに基づいて考察している。夏期休暇中の日本人大学生を主たる対象とするこのプログラムの中心的な活動であるハワイでの職業体験に特に着目した。参加者はハワイにおいて、多様な文化に基づく多様な英語変種の話者との現実のコミュニケーションを経験する中で、職場のスタッフやプログラム主宰者からのサポートも適宜得ながら、国際英語のユーザーとして成長していく。

第１０章では、近年注目されている大学におけるEMI (English-Medium Instruction) すなわち英語による専門授業について、授業観察や筆者自身の大学院授業での実践に基づき、「国際英語」教育の視点から分析する。学部・大学院を問わず、EMIクラスでは、さまざまな国からの留学生が日本人学生とともに学ぶ状況が多く、学問的なコンテクストでの国際英語（いわゆるAcademic ELF）の実践の場であるとともに、グループ・ディスカッションなどを通じて、今日のELFで重視される適応（accommodation）や意味交渉（negotiation of meaning）等をオーセンティックな状況で体験する機会であることなど、国際英語の学びとして大きな可能性を秘めていると論じている。

結びに先立ち、本博士論文では、本研究の限界について述べている。たとえば、第２部で提案している「国際英語」教育研究の体系が暫定的な内容にとどまることや、第４部の「国際英語」授業の実践報告では学習者の「国際英語」能力の実際の伸長に関する客観的な測定は課題として残されていること等である。

そのような限界を有しながらも、従来は混沌とした状況にあった「国際英語」研究において体系的な考察を可能にしたこと、教材・教授法・モデル等の視点から「国際英語」教育の原理の重要点を明らかにしたこと、また当分野における理論から実践への応用が長らく停滞していた中で、国際英語の授業実践への道筋を具体的に示したことなど、種々の点において本研究は世界的に見ても先駆的な意義を有するものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（日野　信行）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	木村　茂雄
副 査	教授	沖田　知子
副 査	准教授	小口　一郎

論文審査の結果の要旨

本論文は、「日本における『国際英語』教育の原理と実践」というテーマの下に著者が1980年代から一貫して取り組んできた研究を、John Benjamins, Multilingual Matters, Springer, Regents/Prentice Hall (現 Pearson), Pergamon Press (現 Wiley) 等による国際学術出版において刊行された論文を中心にまとめたものである。英米の枠を越えた国際コミュニケーションのための英語の多様性を重視する「国際英語」(EIL, English as an International Language) の教育研究のパイオニアとして、当該分野の今日の隆盛に寄与した一連の研究を主軸に、最新の「国際英語」授業の実践報告も含む内容となっている。「国際英語」教育の理論的基盤を構築するとともに、「国際英語」教育の具体的な方法論を提示した、包括的・総合的な「国際英語」研究といえる。

本論文は全４部から構成されている。第１部では、本論文のテーマを概観し、近年のグローバリゼーションの潮流において、日本の伝統的な価値観の尊重と国際化への対応という双方向の要請を満たすような英語教育のあり方として、従来の「英米語」教育とは異なる「国際英語」教育の意義について論じている。

第２部では、当分野の理論的基盤として、著者自身による「国際英語」教育研究の体系を提案する。Smith による古典的なEIL論を出発点として、Kachru を中心とするWE (World Englishes) 論や関連諸分野の知見を取り入れながら、EIL論の全体を再構築し、その観点から「国際英語」教育研究の体系化について論じている。

第３部では、理論から実践への橋渡しの議論として、日本における「国際英語」教育のための教材・教授法・モデルを検討する。まず、日本の英語教科書において、文化的内容の扱いがどのような歴史的変遷を経てきたかを考察し、自文化の表現と異文化理解との関係を「国際英語」教材の視点から論じる。次に、従来の英語教育では、その教授法にも英米の理論が適用される傾向があることを背景に、「訳読」に代表される日本の言語文化的伝統との親和性を担保するような「国際英語」教授法の必要性について考察している。さらに、これまでのWE論は非母語話者独自の英語モデルをポストコロニアル地域にのみに認めてきたのに対し、日本人のようにいわゆるExpanding Circleに属する英語使用者にも独自の英語モデルが必要であることを具体的に論じている。

第４部では、「国際英語」教授法の類型を分析した後、さまざまな「国際英語」授業の実践報告を行っている。著者が講師をつとめた、多様な非母語英語話者とのコミュニケーションを主眼とするラジオ英語教育番組、同じく著者が大阪大学の共通教育での英語授業を通じて開発した、統合的な「国際英語」教授法である IPTEIL (Integrated Practice in Teaching EIL)、また、最も最近の取り組みとして、「英語による専門科目」における日本人学生と外国人留学生との交流を通した国際英語の学び等、貴重な実践例が報告されている。

最後に著者は、グローバリゼーションの潮流において、多様な価値観を有する人々が共存し交流し合う真の意味での多文化社会の建設に貢献することが、著者の「国際英語」研究の究極の目標であることを述べて論を結んでいる。

著者自身も付言しているように、第２部で提案された「国際英語」教育研究の体系と最新のELF (English as a Lingua Franca) 論との関係や、第４部で提示された授業実践における「国際英語」能力の客観的な測定法などに本論文は詳しく立ち入っていないが、それは本研究の不足というより、そのさらなる発展可能性を示すものといえる。

本論文は、非母語話者モデルの「国際英語」教育という新しい分野の形成に貢献した一連の画期的な研究業績からなり、世界レベルにおけるその先駆性はとくに高く評価し得る。また、平明かつ達意の本論文の英語は、著者の主張する国際英語の範たり得るものである。

以上のように、当審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。